

現代の日本語を形成してきた翻訳の現場

邵丹著

『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳
——藤本和子、村上春樹、SF小説家と複数の訳者たち』

松柏社、2022

一定年齢の日本人の読者が外国文学の翻訳についてリアルタイムで経験してきた——あるいはもっと若い読者でも過去の翻訳をたどることで感じてきた——ある種の違和感や、時代を追って生じていった変化の感覚というものがある。一言でいえば、いかにも翻訳調といえる文体がほぼ自明のように（つまりあまり拒否的にではなく）生み出されていた一定の時代を経て、いつしか翻訳の言葉がより洗練されたものになっていったという記憶の感覚である。実際に翻訳に関わる者の視点でいえば、そのように編集者に直接的に要求されることもあるだろうが、むしろ翻訳者自身がそのことを誰に言われるでもなくはつきりと感じとっていたということになるだろうか。

こういった感覚がトランスレーション・スタディーズの理論的な言説と結びついて意識されるようになったのはかなり最近のことである。日本ではジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』（鳥飼玖美子監訳、みすず書房）の翻訳が2009年に出版されたことがおそらく大きな転機となっているように思われる（日本語版は、Jeremy Munday, *Introducing Translation Studies. Theories and Applications*, Routledge, 2nd edition: 2008の翻訳である）。原著の初版は2001年に出版されているが、日本語の文献としては、1980年代半ば以降実質的に展開してゆくことになるトランスレーション・スタディーズのさまざまな理論的言説を、整理されたかたちで一挙に見てとることのできるこの著作は、日本での翻訳をめぐる議論において非常に重要な位置を占めることになったはずだ。

例えば、エヴェン＝ゾハルの多元システム理論において、翻訳文学がある文化のなかで主要な位置を占めるケースについて考察する箇所は、おそらく日本人の読者にとっては、まさに日本における翻訳文化の展開について述べられたことがらであるかのようにも感じられただろう（ここで紹介する邵丹氏の著作『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳』の69-76ページでもやはりエヴェン＝ゾハルについて紹介するとき日本の翻訳文化の状況についても言及されている）。また、1995年に初版が刊行されたLawrence Venuti, *The Translator's Invisibility*の最初の章で導入される「同質化」「異質化」という概念は、それまでも翻訳研究者においてしばしば言及されるものであったとはいえ、ジェレミー・マンデイの著作によってその位置づけの見取り図が与えられることによって、さらに一般化していったことができるように思われる。この概念を導入するにあたって、ヴェヌーティ自身がシュライアーマッハーの1813年の翻訳論（このテキストはドイツ翻訳思想の流れに位置づけられながら、三ツ木道夫が『思想としての翻訳』（白水社）のなかで2008年に日本語に翻訳している）を参照しているが、日本の読者にとっては、この時代のドイツの置かれた状況は、近代化以降の日本の文化的状況と重なり合うものとしてもイメージされるかもしれない。ともあれ、かな



り顕著な翻訳的文体が当たり前のものとして許容されていたある時代の日本語は、ヴェヌーティがもともと意図していたような文化的力学の非対称性の意識とはほとんど無関係に、「異化的翻訳」という言葉によってしばしば説明されることにもなった（柳父章他編『日本の翻訳論』法政大学出版局、2010のなかのいくつかの解説でも、そのような言葉の使い方が見られる）。

前置きがずいぶん長くなってしまったが、邵丹氏の著作『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳——藤本和子、村上春樹、SF小説家と複数の訳者たち』は、そのような日本の翻訳が置かれていたいくぶん特殊な状況が、1970年代以降にどのような転換を遂げていったかを、トランスレーション・スタディーズの理論的言説をバックグラウンドにすえつつ、「村上春樹」という通り道をたどってスリリングに描き出してゆく。1979年に発表された村上春樹の『風の歌を聴け』が群像新人文学賞を受賞することになった際に、選考委員の一人であった丸谷才一が選評のなかで、村上春樹の言葉はヴォネガットやブローティガンから影響を受けているのではないかという指摘をしている。この丸谷の選評の言葉は、この著作のコンセプトの出発点となっている。

村上春樹にとって実際にこの二人の作家が特別な意味をもつものであったことは、村上自身がさまざまところで書いており、またそのこととあわせて井上健『文豪の翻訳力』（ランダムハウスジャパン、2011）も「戦後翻訳史の転換点」として1979-82年の村上春樹の活動に焦点を当てている。しかし、邵丹のこの著作の独自の面白さはなによりも、1970年代末以降、日本の文学のことば、そしてまた翻訳の言葉を決定的に変えてゆくことになった震源地をたずねて実際に歩いて聞き回り、調べ回った成果がそこに生き生きと描き出されていることにある。第一章でトランスレーション・スタディーズのいくつかの理論的言説を概観し、第二章で1970年代の日本の文学と文学翻訳が置かれた歴史的コンテクストについてとりあげたのち、第三章と第四章でそれぞれ「ケーススタディー」として、村上春樹の二つの震源地であるブローティガンとカート・ヴォネガットが扱われるというのが本書全体の構成であり、仕掛けである。とはいえ、村上春樹に決定的な影響を与えたのは、この二人の70年代の作家の英語のテキストだけではない。むしろ、日本語に翻訳されたブローティガンとヴォネガットである。

というわけで第三章は、リチャード・ブローティガンを日本語に訳した著作としては最初のものとなる『アメリカの鱒釣り』の翻訳を1975年に発表し、その後も矢継ぎ早にブローティガンの小説の大半を翻訳した藤本和子をめぐる章となっている。たしかに村上春樹からブローティガンへとたどってきた道ではあるが、「藤本和子を分析対象として選び、思想面文体面の双方から彼女の翻訳作品群の特徴を捉えようと試み」ることが、この章で目指されていることである。それによって、1970年代末以降に日本語の文学の言葉がどのように変わっていったかという本来のテーマがともすればかすんでしまうほどに、この章のなかで読者は、藤本和子がこれまでたどってきた世界のきわめて個人的な領域にまでどっぷりと浸ることになる。ほとんど藤本和子の評伝と言ってよいほどのここでの記述は、さまざまな文献とともにシカゴで行われた藤本和子へのインタビューによって可能になったものだ。それにもとづく論考にも同じようなエネルギー感が漲る。このように藤本和子の過去の世界のうちに仔細に分け入っていくのは、タイトルそのものが表しているように、

「翻訳を産む文学、文学を産む翻訳」の生々しい現場を読者の前に提示するためだ。

同じようなアプローチが、もう一つの「ケーススタディー」であるカート・ヴォネガットの日本語翻訳についてもとられる。ただしこちらは、一人の翻訳者がなかば独占状態となるのではなく、第四章の標題にあるように「一人の作者、複数の訳者——日本語で構築されたカート・ヴォネガットの世界」である。そのため、ヴォネガット（の翻訳）をめぐる第四章では、第三章で藤本和子個人を取り上げたような私的で親密な空間を感じさせるようなものは希薄で、複数の翻訳者の仕事や、ヴォネガットの受容において中心的な役割を果たした SF 小説の翻訳の世界の叙述に焦点が当てられている。

全体を通じて、この著作には目標に向かって突き進むみずみずしいエネルギー感が満ち溢れている。そのあふれんばかりのエネルギーは、複数の対象に関わる圧倒的な量の参考文献と、それによってもたらされた知識の整理においてもはつきりと感じとることができる。1970年代の日本の文化的・社会的状況、文学と翻訳の状況について、その年代をリアルタイムで生きた日本人が感じていたことを、そのときにはまだ生まれてもいなかったであろう中国人の著者がどうしてここまでありありと描き出すことができるのかと、第二章を読んでいても驚嘆の気持ちを禁じ得なかった。そして、それを読者にどのように伝えることができるかがつねに意識されているために、読者をつかんで離さない力をもっている。

周知のように、近代日本語の形成において翻訳は決定的な役割を果たしてきたが、いったん近代の日本語が形成されたのちも、いまでもなお翻訳は日本語をあらたに作り変えつつある。1970年代末以降のあらたな日本語の段階のあと、さらに半世紀近くを経た現在の日本語の翻訳との関係が、もしかすると著者の次の標的かもしれない。

(山口裕之)

